

学会活動の回顧と展望

源化（小原奈津子），⑦ おから含有ポリウレタンの物性と生分解性に関する研究（飯島美夏）

・第22号（平成14年7月）

① 被服材料学会長の任期を終えるにあたって（島崎恒蔵），② 被服材料学の進化と変態（高橋和雄），③ 被服材料学雑考（菊地美知子），④ パターン設計と被服材料学（青山喜久子），⑤ 高分子ハイドロゲルの溶質選択的膨潤（増田陽子），⑥ カルボキシメチルセルロース，ポリリシン分子複合体の膨潤挙動（皆川寧子），⑦ 伊藤啓先生を悼む（矢井田修）

・第23号（平成15年8月）

① 資源としての被服（与倉弘子），② 発達科学部と私の被服学研究（井上真理），③ 繊維製品の制菌加工（中島照夫），④ 絹および絹関連加工製品の開発（米田守宏），⑤ 不織布の技術開発動向と用途展開（矢井田修）

・第24号（平成19年8月）—PDFによる配布

① 紫外線と被服材料（城島栄一郎），② ペプチッドとプロテインの構造転移（高橋和雄），③ 被服材料の教育と研究（松生 勝）

（3）講演会・見学会

・東北・北海道地区 H10/10/9 千本毛晒工場（株）と山崎メリヤス見学，H11/10/1 アツギ石鹸（株）見学，H12/9/28 青森県工業試験場，

・中部地区 H11/3/11 尾張繊維技術センターとテキスタイル館の見学および講演会，H12/3/10 ウール生産・染色工場（サンファイン（株））の見学および講演会，H13/3/1 御幸毛織（株）の見学および講演会

・関東地区 H13/8/29 倉敷紡績（株）岩波工場見学

（4）科学研究費

・平成11-12年度「タンパク質繊維の高度のリサイクルを意図した新加工法に関する研究」（基盤研究A）

研究代表者：伊藤啓他9名

3. 今後の展望

百年に一度といわれる世界的な経済不況，その影響をまともに受けているアパレル産業，少子高齢化と大学淘汰の時代を迎え，女子大学を中心とする被服系学科は学生確保に追われ，やっと確保した学生は理科離れ・学力不足で教育・研究水準の維持に腐心している．現状の打開には専門別に分化した部会単位の努力では限界があり，被服・アパレル産業全体としての教育研究と人材育成の統一的かつ一貫した戦略が必要である．個々の会員が教育研究に今まで以上の力を注ぐことは必須であるが，次の2点が重要である．（1）被服学全体のイメージアップを図るための関係学会間・部会間・業界との連携・協力．（2）会員相互の信頼を深め一丸となるための密な情報交換．八方塞がりのようであるが闇夜の後には夜明けがある．

被服構成学部会

部会長 泉 加代子

1. はじめに

被服構成学部会は，1969年に発足した被服構成学研究委員会を基として，その10年後に部会となり2008年に30周年を迎えた．20周年以前の活動記録は「家政学会誌」Vol.30, No.1（1979），Vol.39, No.5（1988），Vol.49, No.5（1998）に掲載されている．ここでは，1998年から2007年までの10年間の活動について記述する．

大学（特に被服分野）を取り巻く環境の変化にともない部会員数は259名（1998）から156名（2008）へと大幅に減少したが，この間の部会長を務めた林 隆子（1998-99），（故）永井房子（2000-01），高部啓子（2002-03），大村知子（2004-05），猪又美栄子（2006-07）と約20名の運営委員は，従来の部会の主な事業である総会と夏期セミナー，研究例会，部会誌の発行

に加えて，新たに海外研修，科研費補助金研究成果公開促進費の申請，全国中学生創造ものづくり教育フェアの後援・協賛など国際交流や社会との連携へと事業を拡大して，部会活動を活性化した．

2. 部会の活動

（1）総会および夏期セミナー ○は実行委員長

1）平成10年度（1998/8/27-28，アルカディア市ヶ谷）○高部啓子，20周年記念行事「これからの被服構成学へのメッセージ」（祖父江茂登子・増田茅子・古松弥生・木岡悦子），「被服教育への提言と実践」（柳沢澄子），フォーラム「パターンとゆとり」（間壁治子・伊藤晴子・陰地峻作），「新素材と縫製」（斎藤景一郎・田中百子・柴山登光），「消費者とアパレル商品」（芦澤昌子・村上光子・源内哲之）

2）平成11年度（1999/10/15，サンピア福山）講

演「スキージャンプV字飛行の時代とウェアの機能性」(渡辺和彦)。海外研修との兼ね合いで夏期セミナーは実施しなかった。

3) 平成12年度(2000/8/24-25, 大妻女子大学) ○大村知子, 講演「CGを使ったテキスタイルデザイン教育の試み」(畠山絹江), 講義「POWER POINTでできること」(伊平保夫), 演習「POWER POINT I, II, III」(伊平保夫・佐藤 一)

4) 平成13年度(2001/8/27-29, 東レ総合研修センター) '01被服学関連部会合同夏季セミナー, テーマ「衣生活を支える“被服学”」, 講演「被服学教育の動向」(林 隆子), 部会企画シンポジウム「新しい被服構成学教育をさぐる」(千葉桂子・芦澤昌子・小田明美・富田明美)

5) 平成14年度(2002/8/28-29, アルカディア市ヶ谷) ○芦澤昌子, テーマ「被服構成学は福祉社会にどのように貢献していくか」, 講演「衣服と身体の動きの密接な関係」(山口光國), 「加齢や病気・けがによる身体の変化」(井上和彦), 「身体の機能障害と衣服との関係について」(岩波君代), 「高齢者・障害者用商品の開発」(藤井孝子), 「福祉衣料研究会からユニバーサルウェアまで」(田川香津子), 事例報告(渡邊敬子・雙田珠巳・千葉桂子)

6) 平成15年度(2003/8/27, 実践女子大学) '03被服学関連部会合同夏季セミナー, テーマ「被服学の新しい方向を探る」, 部会企画「被服構成学に関連する新しい情報技術を用いた機器やソフトのオペレート体験」

7) 平成16年度(2004/8/30-31, 昭和女子大学) ○猪又美栄子, テーマ「“新人体計測考”ユニバーサルデザインの視点から—ここが必要, そこが知りたい—」, 講演「衣服設計の基本としての人体計測」(高部啓子), 「水まわりのユニバーサルデザインへの取り組み」(滝口隆三), 「衣服のユニバーサルデザイン」(吉田ヒロミ), シンポジウム「身体状況に応じた計測」(布施谷節子・渡邊敬子・渡辺聰子・川上 梅・岡部和代), 人体計測演習

8) 平成17年度(2005/10/30, 日本女子大学) 講演「高齢になるとは, 障害をもつとは」(長谷川幹)。海外研修との兼ね合いで夏期セミナーは実施せず。

9) 平成18年度(2006/8/22-23, 東京家政大学) ○雲田直子, テーマ「被服構成学の研究・教育に生かすプレゼンテーション技術 Part II—動画を教材に取り入れよう—」, 講演「わかりやすい授業のためのIT

技術」(松木孝幸), 事例紹介(猪又美栄子・薩本弥生・鳴海多恵子・田中早苗), 演習「実習指導のための動画教材制作」(三村 坦)

10) 平成19年度(2007/8/27-28, 神戸ファッション美術館・神戸女子大学教育センター) ○岡部和代, テーマ「ファッションの魅力」, 講演「アンダーウェアとプロポーションの歴史」(百々 徹), 宝塚歌劇団の舞台衣装のデザイン」(任田幾英), 事例報告(定延久美子・森下あおい), 見学「神戸ファッション美術館特別展示: マリー・アントワネット生誕250年記念—18世紀麗しのロココ衣装展」(ハヤシ・サリー)「北野クラブ・ソラ」(クチュール・ナオコ)

(2) 研究例会

1) 平成10年度(1998/5/30, 日本女子大学) テーマ「米国における被服教育について」講演「バージニア州立バージニア工科大学のアパレルデザインのプログラム」(Dr. Catherine Cerny, Dr. Joann Boles)

2) 平成11年度(1999/10/15, サンピア福山) ○古田幸子, 講演「メンズユニフォームの機能性」(児玉久光), 事例報告(森 由紀・川上 梅), 見学「自重堂」

3) 平成12年度(2000/12/9, 文化女子大学) ○佐藤眞知子, 講演「新素材のファッション性と造形性」(太田義一), デモンストレーション「和服縫製用特殊ミシンについて」(堀田善行)

4) 平成13年度(2001/12/1, 京都女子大学) ○畠山絹江, 講演「花洛のモード—寛文小袖と東福門院—」(川上繁樹), 事例報告(春日 綾・原田妙子)

5) 平成14年度(2002/11/30, 椋山女学園大学) ○富田明美, 講演「衣と医の関わりと福祉の心」(篠田達明), 事例報告(柴田美紀子・川端博子), 作品展示(村田温子・田口育子)

6) 平成15年度(2003/12/6-7, 京都女子大学) ○泉加代子, 講演「シルクロードの民族衣装と染織」(名和野要), 事例報告(山本高美・渡辺明日香), 見学「西陣意匠紋紙工業協同組合」(井筒風俗博物館)

7) 平成16年度(2004/12/11, 福井大学) ○服部由美子, テーマ「被服構成学におけるユニバーサルファッション“着装”をサポートする福祉関連製品」, 講演「色を音声で伝える器具, カラートークの紹介」(上田正紘), 「高齢者・福祉衣料の製品化研究と服飾資材の開発事例」(黒川和男), 「メガネの企画, デザインについて」(小永幹夫)

8) 平成17年度(2005/10/30, 日本女子大学) ○

学会活動の回顧と展望

大塚美智子, 講演「日本のアパレルの現状」(斉藤敬子), 「ヨーロッパのオートクチュールとプレタポルテの現状」(滝澤 愛), 事例紹介(大塚美智子)

9) 平成 18 年度(2006/12/9, 文化女子大学) ○佐藤真知子, テーマ「男のおしゃれ」, 講演「男のシャツ」(嶋崎隆一郎), ギャラリートーク「世界の男性衣裳にみる美意識」(吉村紅花), 見学「文化学園服飾博物館」

(3) 部会誌の発行

部会誌は年 1 回, 3 月末に発行している。1999 年 3 月には 20 周年記念特集号を発行した。

(4) 公開講座

1) 平成 10 年度(1998/8/28, アルカディア市ヶ谷) ○高部啓子, テーマ「高齢者と衣服」, 研究報告「高齢者と体型」(中保淑子), 「高齢者と着装」(伊地知美和子), 「高齢者と既製服」(田中美智), 高校における授業実践報告「高等学校における『高齢者と被服』の学習指導に関する研究」(志村結美・増田智佳子・高橋和子・高橋ヨシ子)

2) 平成 19 年度(2008/3/21, 和洋女子大学) ○布施谷節子, テーマ「生活を豊かにする衣服—着心地の良い快適な衣服を求めるために—」, シンポジウム「人の体と着心地の良い衣服」(大村知子・石垣理子・雙田珠巳), 「心を元気にする衣服」(泉加代子・芦澤昌子・山本邦昭), 展示とワークショップ(嶋根歌子・薩本弥生・泉加代子・大塚美智子・大村知子・平林優子), ポスター発表, 参加者: 約 120 名

(5) 科研費補助金研究成果公開促進費による公開講座

1) 平成 15 年度(2004/3/26, アルカディア市ヶ谷) ○大村知子, テーマ「楽しさと感動を呼び起こす布を使ったものづくり」基調講演「布による“もの作り”に先立って」(林 隆子), シンポジウム(服部由美子・嶋海多恵子・佐藤真知子・金谷喜子), ワークショップ(布施谷節子・佐藤真知子・田中美智), デモンストレーション(田中百子・金谷喜子・雲田直子), 参加者: 126 名

2) 平成 16 年度(2005/3/24, ウィル愛知) ○冨田明美, テーマ「布と糸と針を使った楽しいものづくり—創造性の育成—」基調講演「ものづくりの基本…糸・布・針」(林 隆子), シンポジウム(服部由美子・嶋海多恵子・佐藤真知子・金谷喜子), ワークショップ(布施谷節子・渡部旬子・磯崎明美・田中美智・高橋裕子), デモンストレーション(田中百子・金谷喜子・

白石孝子), 参加者: 145 名

3) 平成 17 年度(2006/3/25, 広島市まちづくり市民交流プラザ) ○泉加代子, テーマ「布と糸と針が拓く未来—楽しいものづくり, 創造性育成と技の伝承—」基調講演「布と糸と針によるものづくり」(高部啓子), シンポジウム「ものづくりの要素と最新の動向」(雲田直子・嶋海多恵子・佐藤真知子・林 仁美), ワークショップ(布施谷節子・磯崎明美・森 由紀), デモンストレーション(田中百子・村田温子・白石孝子), 参加者: 112 名

(6) 海外研修

1) 第 1 回(1999/8/26-9/4) アメリカ合衆国東海岸. アメリカ織物歴史博物館, モルデンミル社リテールストア, ルイーズボストン, ボストン美術館, ロードアイランド大学, ファッション工科大学, メトロポリタン美術館修復部門などを視察. 参加者: 32 名

2) 第 2 回(2002/8/7-16) アメリカ合衆国東海岸. ITAA (International Textile & Apparel Association) 年次大会参加. ハーグレイ博物館, 航空宇宙博物館, ナショナルギャラリー, 国立アメリカ歴史博物館, ノースカロライナ州立大学繊維学部, TC スクエア公社などを視察. 参加者: 16 名

3) 第 3 回(2005/8/30-9/10) フランス・イタリア(フランスのみは 9/6 まで) リヨン繊維化学技術大学, リヨン織物歴史博物館, フランス繊維・アパレル研究所, パリプレタポルテ展示会, コモ湖畔の織物染色工場と絹教育博物館, ミラノのアパレルメーカー, フィレンツェのレザーファクトリーなどを視察. 参加者: 23 名(内, フランスのみ 10 名)

(7) 報告書作成

部会員から原稿を募集し, 平成 16 年 3 月に「被服製作に関わる授業の実践例」を出版した

(8) 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援・協賛

全国中学生創造ものづくり教育フェアを第 3 回(2003)から継続して後援・協賛し, 審査員として協力するとともに, 被服構成学部会賞と奨励賞を授与している。第 4 回と 5 回はワークショップを出店した。

(9) 部会ホームページ

平成 15 年 3 月に部会のホームページを立ち上げ, その後, 平成 18 年にリニューアルして, 維持管理を続けている。

3. 今後の課題と展望

以上この 10 年間の部会活動を振り返ると, 高齢者・

障害者・福祉・ユニバーサルデザインなど社会のニーズに応じたテーマのセミナーや研究例会を数多く開催し、これらの研究成果を社会に還元するために高校教員や一般市民を対象とした公開講座を開催している。平成 19 年度の公開講座の内容の一部は朝日新聞（関東版：2008/5/30、関西版：6/10 の朝刊）に大きく掲載され、多くの読者からの反響も寄せられた。平成 20 年度は科学研究費補助金研究成果公開促進費を得て一般市民対象の公開講座を実施する。超高齢社会に突入した我が国で最も要請されるテーマであり、部会員のさらなる研究の推進と社会貢献が期待される。

また、家庭科の学習指導要領の改訂にともない被服製作が選択となり軽んじられている現状を鑑み、全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援・協賛を行っている。高校生への働きかけとして、3 年連続して科学研究費補助金研究成果公開促進費の交付を得て公開講座を開催し、布と糸と針を使ったものづくりの楽しさを体験する機会を提供したことは特筆すべき活動である。今後は小学生とその母親を対象としたものづくりへと対象者の幅を広げ、子供の創造性・巧緻性を育み、脳の発育を助け生きる力を育てる被服製作教育の重要性を発信していきたい。

国際交流に関わる活動としては、3 回の海外研修を実施し、2002 年の海外研修ではニューヨークで開催された ITAA 年次大会に参加し部会員が研究発表をした。それ以後、毎年 ITAA に参加している部会員

もいる。2004 年に京都で開催された国際家政学会、2005 年に韓国の衣類学会と日本家政学会の被服学関連部会が合同で開催したソウルでの国際学会では多数の部会員が研究発表をしている。今後さらにこのような交流の機会を増やすとともに、国際家政学会は実践研究やテキスタイルの展示もあるので、部会員の国際学会発表の場として活発な参加を推奨していきたい。

部会員数の減少とポスター発表の定着を反映して、家政学会総会での口頭発表数は減少した。家政学会誌掲載論文数も減少傾向にある。しかし、部会員の学位取得者数はこの 10 年間で著しく増加し、公的機関や企業との共同研究も始められている。本部会員の年齢構成を見ると今後ますます会員数は減少することが予測される。部会が発展するためには若手研究者の育成と、これからも社会のニーズに応じた研究、その研究成果の社会への還元を継続して推進していくことが重要な課題である。

2009 年度の科学研究費補助金研究成果公開促進費の申請から重複応募の制限が加わり、同一学会からの応募は原則として 1 件しか認められなくなったことは、これまでのように本部会独自で公開講座を開催することが難しくなると思われる。他の部会との共同研究を視野にいたした活動も今後必要になってくると考えられる。今後 10 年間の活動方針が、被服構成学部会の継続・発展を左右する、まさに正念場と言えよう。

生活経営学部会

部会長 大竹 美登利

生活経営学部会は、部会長と 6 地区から選ばれた地区役員計 15 名、会計監査 2 名の役員で運営されている。その中心的な運営は、15 名の地区役員から互選された 8 名と部会長から構成される常任委員会が担っている。活動の中心は、毎年 8 月に開催される夏期セミナーおよび総会、3 月の会誌『生活経営学研究』の発行である。また 6 つの地区会はそれぞれに独自の研究活動を行っている。さらに、特別研究委員会などが組織され、研究活動を行っている。これらの 10 年間の活動を以下に振り返る。

1. 総会および特別な取り組み

部会員は 273 (1998)～261 (2007) で推移している。部会運営の最高決議機関は総会であり、毎年 8 月に行

われる。この 10 年間の総会決議のうち、重要なものは、① 部会名称の変更 (1998)、② 4 部会合同セミナーの開催 (1998)、③ 30 周年記念出版 (1999)、④ IFHE ポストコンGRESの開催 (2003)、⑤ 生活経営学部会・家庭経済学部会統合案 (2007) である。

(1) 部会名称の変更

1998 年に部会の名称を「家庭経営学部会」から「生活経営学部会」へと変更した。このことは 1 年かけて常任委員会で議論され、1996 年の総会に提起し、様々な意見を集約した後、会員の意見調査を行い、1997 年の総会で決定され、1998 年 3 月から実施された。名称変更の理由は、家庭経営学という名称のもつ古めかしい良妻賢母のイメージを払拭する戦略的理由